

感情誤帰属手続きによるスポーツにおける潜在的態度の測定

藤 田 勉 *

(2013 年 10 月 22 日 受理)

Implicit attitude for sports by affective misattribution procedure

FUJITA Tsutomu

要約

本研究の目的は、スポーツにおける潜在的態度を感情誤帰属手続き (Payne et al., 2005) によって測定することであった。研究の方法は、大学生(女子)46 名を対象とした実験法であった。被験者の内訳は、小学校から大学まで学外スポーツクラブや運動部活動を一度も辞めずに継続してきた体育専攻学生 24 名と小学校から大学まで一度も体育授業以外でスポーツをした経験がない学生 22 名であった。実験には感情誤帰属手続きの実験プログラムが組み込まれているパソコンが使用された。実験プログラムには、スポーツの画像と日常生活の画像がプライム画像として組み込まれていた。感情誤帰属手続きによる潜在的態度の測定では、プライム画像に対する感情が曖昧図形に誤帰属されるため、プライム画像ではなく、曖昧図形へのポジティブ反応率で評価された。結果は、スポーツの画像へのポジティブ反応率は経験者が未経験者よりも高かったが、日常生活へのポジティブ反応率はスポーツ経験で有意な差は示されなかった。

キーワード: スポーツ, 体育, 動機づけ, 潜在指標, 運動参加

* 鹿児島大学教育学部 准教授

はじめに

近年、社会心理学では、従来から心理測定法の中心となってきた質問紙法（顕在指標）とは別に潜在指標と呼ばれる意図的に回答をコントロールすることが難しい測定法の研究が盛んに行われている。その代表格として、Greenwald et al. (1998) が開発した潜在連合テスト（Implicit Association Test, 以降、IAT とする）がある。IAT の出現後、潜在指標の開発が活発に行われるようになり、GNAT（Go / No-go Association Task, Nosek and Banaji, 2001）や EAST（Extrinsic Affective Simon Task, De Houwer, 2003）など、多様なアプローチが展開されている。Payne et al. (2005) は、新しい潜在指標の測定法として、感情誤帰属手続き（Affective Misattribution Procedure, 以降、AMP とする）を開発した。AMP は、IAT よりも優れていると評価する研究者もいるほどであり、研究成果としても、AMP とタバコの喫煙本数（Payne et al., 2007）やアルコール飲料の摂取量（Payne et al., 2008）との関連が示されている。

わが国においても AMP を使った研究は始まっている。及川ほか (2009) は、AMP で測定される概念を潜在目標と定義し、勉強に関する画像へのポジティブ反応率を潜在的な勉強目標の値、遊びに関する画像へのポジティブ反応率を潜在的な遊び目標の値とした。そして、AMP 測定後の2週間後に勉強と遊びそれぞれの顕在目標（この場合の顕在目標は、勉強の重要度と遊びの重要度のそれぞれを質問紙による7件法で回答するものであった）を測定し、潜在目標と顕在目標の相関関係を検討した。さらに、勉強した時間と遊んだ時間のそれぞれを7件法により自己報告する回答も求め、この値を行動指標として、潜在目標と顕在目標のそれぞれとの相関関係を検討した。その結果、勉強については、潜在目標と顕在目標に中程度の正の相関が示されたが、両目標それぞれと勉強時間の自己報告は無相関であった。また、遊びについては、顕在目標と潜在目標は無相関、顕在目標と遊び時間の自己報告は無相関であったが、潜在目標と遊び時間の自己報告に中程度の正の相関が示された。これらのことは、AMP が実際の行動を予測する可能性を示唆するものであった。

現時点では IAT の先行研究の数は AMP を圧倒している。しかしながら、AMP は IAT よりも7年後に発表された比較的新しい測定法であり、明らかに IAT よりもシンプルなプログラムである。また、測定にかかる時間が短く、簡便である。そして、IAT は1つの概念のみの測定になるが、AMP では複数の概念を同時に測定することが可能になる。IAT も AMP もそれぞれに独自の視点があり、また、妥当性や信頼性についても両者の主張がある。現時点では、どちらが潜在指標の測定法として優れているかということまでは明言できないが、今後の研究の展開からは目が離せないということは間違いない。

これまでの研究は社会心理学を中心とした領域であり、スポーツ心理学では AMP を用いた研究は国内外で全く行われていないが、前述の特徴からしても、AMP がスポーツへ応用可能であるかを検討する価値はあると考える。そこで本研究では、AMP によるスポーツにおける潜在的態度を測定し、スポーツ経験の違いが潜在的態度に影響し得るかを検討する。

方法

教育学部に所属する大学生の女子 46 名を被験者とした。被験者の内訳は、大学で体育を専攻し、小学校から大学までスポーツ（学外のスポーツクラブ又は運動部活動）を続けてきた学生 24 名（スポーツ経験群）と、体育以外を専攻し、小学校から大学まで体育の授業以外に一度もスポーツをしたことがない学生 22 名（学外のスポーツクラブ又は運動部活動に一度も所属した経験がない者）（スポーツ未経験群）であった。

AMP の測定はパソコンで実施した。実験のプログラムは心理学実験用プログラムソフトの INQUISIT3.0 を使用した。本研究では、スポーツの経験者と未経験者の違いが AMP のスコアに示されるか否かを検討した。スポーツの経験者は未経験者よりもスポーツの画像に対する評価へのポジティブ反応率は高いが、日常生活の画像に対する評価へのポジティブ反応率には差がないと考え、スポーツの画像 8 枚と日常生活の画像 8 枚を 1 つの実験プログラムに組み込んだ。スポーツの画像は全て女性の画像であり、バレーボール、サッカー、水泳、陸上競技など、体育専攻学生が大学で実技の授業を受講した種目を選定した。また、日常生活の画像も全て女性の画像であり、ソファでくつろいでいる、パソコンを利用している、電話をしている、勉強をしているなど、大学生の生活の中であり得る場面の画像を選定した。

AMP は、ディスプレイに瞬時に連続して呈示される画像に対して、「どちらかといえば好き」（ポジティブ）あるいは「どちらかといえば嫌い」（ネガティブ）をキーボードで回答する。本研究では、ポジティブと回答する場合には、「I」のキー、ネガティブと回答する場合には、「E」のキーを打つよう被験者に教示した。本研究の AMP では、スポーツの画像と日常生活の画像は 1 つの実験プログラムに組み込まれているため、1 度の測定で 2 つの概念が測定できるものであった。実験プログラムが開始されると、スポーツの画像、日常生活の画像、中性（灰色）の画像のいずれかが 75ms 呈示され、125ms のブランク後に曖昧（図形）画像が 100ms 呈示され、最後にランダムドットのパタンマスクが呈示される。被験者は最初に呈示される画像に惑わされることなく、図形に対する印象を回答するよう教示を受ける。実験開始後、呈示された画像に対して、「I」又は「E」のキーを打つと、次の画像が提示されるようになっている。

AMP の測定は、実験室内で行われた。被験者は実験室に入室後、テーブルに着席し、実験者から実験の内容と手順について説明を受けた。その後、実験協力への同意を求め、同意が得られた後に AMP を開始してもらった。実験の手順については口頭でも説明したが、実験プログラムが進行していく過程にはディスプレイにブロックごとの説明が呈示されるようになっている。実験は説明の時間を含めても 5 分程度で終了した。実験終了後、被験者に実験の目的をたずねたところ、目的に気付いているものはいなかったが、具体的に知りたい学生に対しては実験の目的を伝えた。

データの分析では、スポーツの画像へのポジティブ反応率（0% ～ 100%）、日常生活の画像へのポジティブ反応率（0% ～ 100%）をそれぞれ経験群と未経験群で比較した。統計解析は t 検定により行われた。分析に使用した統計解析ソフトは、SPSS21.0 であった。

結果

スポーツの画像と日常生活の画像それぞれへのポジティブ反応率について、経験者と未経験者の違いを明らかにするため、t検定を行った。その結果、スポーツの画像については経験者の方が未経験者より有意に高いポジティブ反応率を示し、日常生活の画像については経験者と未経験者に有意な差は示されなかった（表1、図1、図2）。これらのことは、スポーツに対して経験者は未経験者よりも潜在的な好意的態度を持っており、日常生活における潜在的な好意的態度はスポーツの経験による違いは見られないことを示している。

表1. 各AMPの平均値と標準偏差

	未経験群（22名）		経験群（24名）		t値	p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
スポーツ	56.46	25.35	69.67	17.97	-2.053	0.046
日常生活	63.14	22.95	61.83	15.36	0.228	0.821

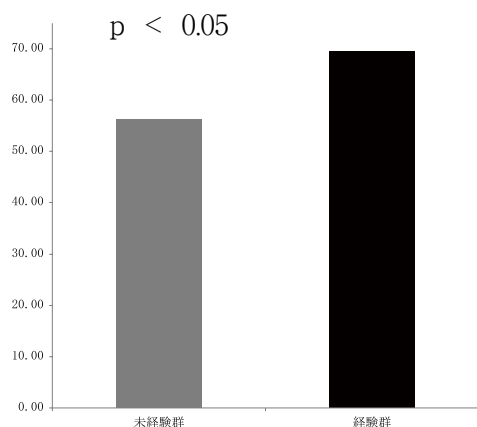


図1. スポーツの画像

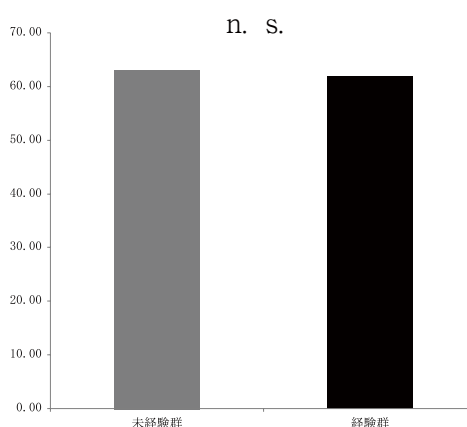


図2. 日常生活の画像

考察

本研究では、スポーツに対する潜在的態度をAMPによって測定し、スポーツの経験者と未経験者の違いを検討した。経験者24名と未経験者22名に対して、スポーツの画像と日常生活の画像が組み込まれているAMPを実施し、スポーツの画像に対するポジティブ反応率と日常生活の画像に対するポジティブ反応率のそれぞれを2群でt検定によりその差を分析した。その結果、スポーツの画像に対するポジティブ反応率については、経験群が未経験群よりも高い値を示し、日常生活の画像に対するポジティブ反応率については両群に有意な差は示されなかった。

スポーツに接する機会が子どもの頃から多く、継続期間も長ければ、スポーツに対する好意

的な態度が形成されるという同様の知見は、従来の研究でも示されてきた。本研究は従来の研究結果を支持すると同時に、潜在指標においても同様の結果が得られることを示した。また、日常生活への好意的な態度が経験者と未経験者で違いがないことが示されたことは、スポーツ経験に関係なく一般的な大学生の生活を測定できていたことを示唆している。これらのことからすれば、本研究の AMP はスポーツ経験の違いを示す潜在指標として一定の妥当性は得られたと考えている。

しかしながら、スポーツ参加の現状を考えると、スポーツ経験というのは、長期間継続している経験者と全くスポーツをしたことがない未経験者という区別のみではなく、これらの中間のようなパターンもある。例えば、筒井ほか（1996）によれば、1573 名の大学生を調査したところ、経験者と未経験者という明確な区別のみならず、経験者の中でも、同一種目を継続する者以外に、異種目で継続している者、一度辞めてから復帰する者、途中で離脱していく者など、様々なパターンがあるという。したがって、現実的にはスポーツ経験を経験者と未経験者のみの区別で扱うことには限界がある。今後は AMP がどの程度までスポーツキャリアパターンを弁別できるかを検討してみたい。また、本研究で使用したスポーツの画像及び日常生活の画像の全ては女性に限定したものであったため、男性についても検討していく必要があると考えている。現時点では検討の余地が多い AMP であるが、克服できない困難な課題があるわけではない。研究の展開次第では大きな飛躍が期待できると考えている。今後の発展に期待したい。

文献

- De Houwer, J. (2003). The extrinsic affective Simon task. *Experimental Psychology (Formerly Zeitschrift Für Experimentelle Psychologie)*, 50 (2), 77-85.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., and Schwartz, J. L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: the implicit association test. *Journal of personality and social psychology*, 74 (6), 1464.
- Nosek, B. A., and Banaji, M. R. (2001). The go/no-go association task. *Social cognition*, 19 (6), 625-666.
- Payne, B. K., Cheng, C. M., Govorun, O., and Stewart, B. D. (2005). An inkblot for attitudes: affect misattribution as implicit measurement. *Journal of personality and social psychology*, 89 (3), 277.
- Payne, B. K., McClernon, F. J., and Dobbins, I. G. (2007). Automatic affective responses to smoking cues. *Experimental and clinical psychopharmacology*, 15 (4), 400.
- Payne, B. K., Govorun, O., and Arbuckle, N. L. (2008). Automatic attitudes and alcohol: Does implicit liking predict drinking?. *Cognition and Emotion*, 22 (2), 238-271.
- 及川晴・及川昌典・林唯 (2009). 感情誤帰属手続きによる潜在目標の測定. *教育心理学研究*, 57 (2), 192-200.
- 筒井清次郎・杉原隆・加賀秀夫・石井源信・深見和男・杉山哲司 (1996). スポーツキャリアパターンを規定する心理的要因: Self-efficacy model を中心に. *体育学研究*, 40 (6), 359-370.